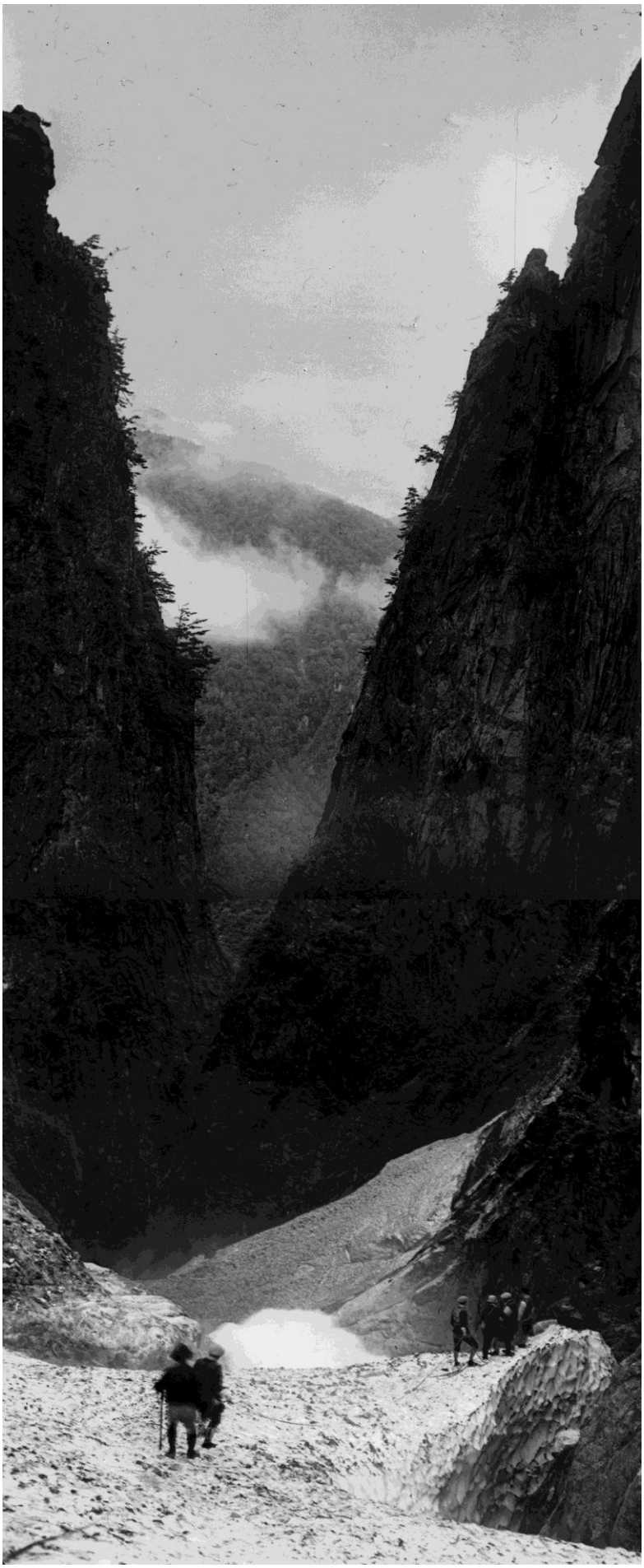


冠松次郎 ≪劔の大滝を囲む大岩壁≫ 1926（大正 15）年 6 月

黒部と槍

冠松次郎と穂苅三寿雄

Valleys and Peaks;
Kanmuri Matsujiro and
Hokari Misuo

2014 3.4【火】—5.6【火・休】

2 階展示室

東京都写真美術館

展覧会概要

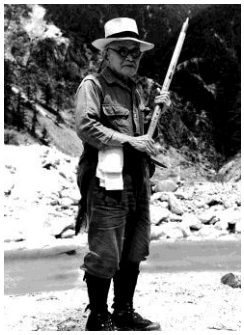
東京都写真美術館では、戦前のわが国の登山史上もっとも著名な登山家の一人であり、黒部渓谷の地域探査や山岳紀行文で知られる冠松次郎と、北アルプスで最初期に山小屋経営を行い、山岳写真や槍ヶ岳を開山した播隆上人の研究でも知られる穂苅三寿雄を紹介する展覧会「黒部と槍」を開催いたします。

冠松次郎は、明治 16（1883）年、現在の東京都文京区に裕福な質商の家に生まれ、明治 35（1902）年頃から登山に目覚めました。明治 42（1909）年、26 歳で日本アルプスの踏査を開始、同年、辻村伊助の紹介で日本山岳会に入会。その後黒部の自然に魅せられ、大正 7（1918）年、立山から黒部本流に足を踏み入れたのを皮切りに、秘境・黒部渓谷を舞台に数々のパイオニア・ワークを果たし、多くの写真と紀行を残し「黒部の主」の異名をとりました。

穂苅三寿雄は明治 24（1891）年、現在の長野県松本市に生まれ、幼い頃から山に親しみ、明治 40（1907）年に初めて上高地に入り、大正 3（1914）年には初めて槍ヶ岳に登ります。上高地・槍ヶ岳一帯の登山道の整備を機に、山小屋建設を決意、大正 6（1917）年に槍沢小屋を開設しました。この頃から独学で写真を学び、松本市内に写真館を開業して山岳絵はがきを販売するかたわら、山岳写真を撮り始め、地の利を活かした秀作を数多く撮影、大正末期の積雪期の作品など先駆的な業績を数多く残しました。

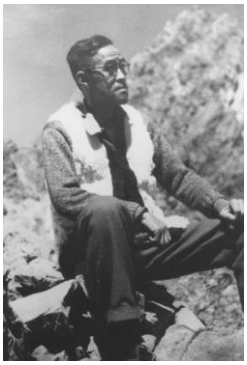
多くの人びとを魅了してきた「黒部渓谷」と「北アルプス・槍ヶ岳」。本展覧会では、日本が世界に誇るこれらの美しい自然をテーマに、現存するオリジナル・プリントや多彩な資料で、初期日本山岳写真史にその名を刻む二人の偉業を検証します。
（写真作品 134 点と関連資料で構成）※カタログ作品リストの 43･57･67 は未展示

冠松次郎　かんむり・まつじろう（1883-1970）



1911（明治 44）年、白馬岳から宇奈月に出た際、初めて黒部に接し、その自然に魅せられる。その後、立山から御山谷を下り黒部本流に足を踏み入れたのを皮切りに、1920（大正 9）年に下ノ廊下初下降、1925（大正 14）年に下ノ廊下完全遡行および十字峡の発見と命名など、数々のパイオニア・ワークを果たす。生涯に書き記した 30 を超える著作により、黒部を紹介した。

穂苅三寿雄　ほかり・みすお（1891-1966）



1917（大正 6）年 10 月、槍沢のババ平に北アルプスで 2 番目の営業小屋となる槍沢小屋を建設、1921（大正 10）年に大槍小屋、1926（大正 15）年に肩の小屋をそれぞれ建設。大正初期から写真家としても活躍、1939（昭和 14）年には東京山岳写真会（現・日本山岳写真協会）の創立会員として参加。播隆上人研究家としても知られ、1963（昭和 38）年『槍ヶ岳開祖 播隆』を出版。

冠松次郎と穂苅三寿雄の魅力

日本における山岳写真のパイオニアである冠松次郎と穂苅三寿雄。明治大正の時代、およそ１００年前から活躍した彼らの写真には、今も変わらない厳しい山の姿を見ることができるが、一方で、いまはもう見ることのできない失われた自然も多く写されている。まだ日本の山が「秘境」と言われた時代に活躍した先駆者たる二人は、どのような作家であったのだろうか。

インタビュー：神長幹雄（『山と溪谷』元編集長）×関次和子（東京都写真美術館学芸員）

2013 年 10 月インタビュー、広報誌『eyes 80 号』より抜粋・編集

穂苅三寿雄 ≪雲晴れる槍ヶ岳≫ 1924（大正 13）年－1941（昭和 16）年

Q: 穂苅三寿雄の作品の特徴をおしえてください。

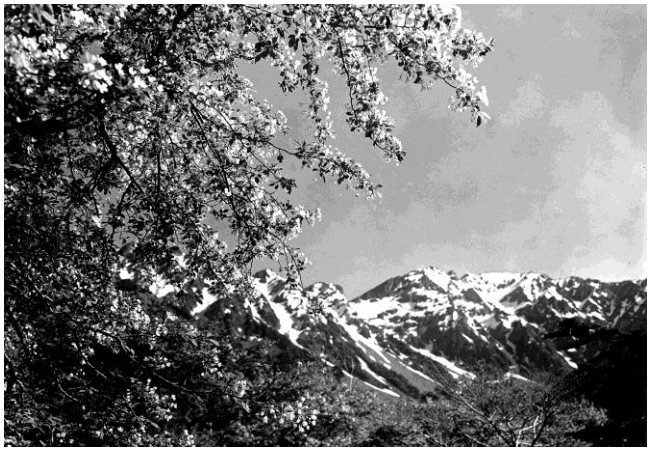
神長「自然をあるがままの美しさで表現できる作家でした。穂苅さんが撮った大正池の写真は素晴らしい。今では、写真に写っている枯木はほとんどなくなってしまって、全く違う風景になってしまいました」

関次「穂苅さんの作品はどれも、山を生活の拠点とし、自然とともに生きた人であったからこそ、撮ることができた写真だったと思います。ご自身は、大正 3 年 7 月に槍ヶ岳登頂を果たしていますが、その後、革新的なことをいろいろと行っているのです」

穂苅三寿雄 ≪冬の焼岳と大正池≫
1924（大正 13）年－1941（昭和 16）年

Q：革新的なこととは？

関次「槍ヶ岳のある北アルプスは、3,000 メートル級の山が連なる日本でも有数の大山脈です。そこに最初に山小屋ができたのは白馬岳でしたが、軍の測量部の岩室を改造した簡易なものでした。その次に出来たのが、穂苅さんが大正 6 年に建設した槍ヶ岳の槍沢小屋でした。まだ登山客も少ない大正時代の黎明期に、わざわざ山小屋を建てて経営しようという発想は、とても革新的なことでした」



穂苅三寿雄 ≪コナシの花と穂高岳≫
1924（大正 13）年－1941（昭和 16）年

神長「この時代、山小屋建設は本当に大変なことでした。今と違って当然ヘリコプターもないので、資材や荷物をすべて人力だけで山の上まで運ばないといけなかったのです」

関次「まさに執念ですね。それだけの強い思いがあったからこそ、槍ヶ岳を開山して厨子を設置し、三尊像を安置し、登山道を整備した播隆上人（ばんりゅうしょうにん）の研究にも力を注いだのでしょう。穂苅さんは登山家、写真家としてだけでなく、山小屋の経営者、研究者、文筆家としてなど、総合的に槍ヶ岳に関わっていったのです」

Q：写真は、どれも迫力のあるものばかりですね。

神長「穂苅さんは、ただ山を撮れば良いというのではなく、構図に工夫があったり、人を風景の中に配置してみたりと、“見る”ことと“伝える”ことを同時に考えるような報道写真の感覚があった人だと思いますね。また、松本で写真館を経営していたこともあって、人物を生き生きと撮る写真家でした。人を魅力的に撮れるのは、シャッターを切るタイミングが非常に上手いということでもありますから」

Q：では冠松次郎とは、どういう方だったのでしょうか？

冠松次郎　≪小窓の雪渓より鹿島槍ヶ岳を望む≫ 撮影年不詳

神長「黒部をこよなく愛した登山家、そして、文章を書く人でした。穂苅さんも文章を書く人でしたが、量は断然、冠さんのほうが多い。昭和 33 年刊行の『アルプ』という雑誌がありまして、その中でも、冠さんはかなりの数を寄稿しているんです。山登り、つまり未知に対する強い憧れとともに、文章と写真で記録に残すということをすごくイメージしていた人ではないかと思います」

関次「生前に著した本は 30 冊を越えています。ダムが建設されるまで黒部は人の入らない秘境の地でしたが、そこに冠さんは分け入

って、渓谷の素晴らしさ、厳しさを人々に伝えていったんです」

神長「その生き方を讃えて詩人の室生犀星が書いた〈冠松次郎氏におくる詩〉の一節

＜剱岳、冠松、ウジ長（宇治長次郎）、熊のアシアト、雪渓、前剱、
粉ダイヤと星、凍つた藍の山々、冠松、ヤホー、ヤホー＞ （カタログ P172 下と別紙参照）

は、とても印象的ですね」

Q：冠松次郎の写真作品にはどのような特徴があるのでしょう？

神長「沢の写真は被写界深度のとり方が難しくて、どうしても画が平板になってしまうんです。なかなか光が入らないので、撮影は一層難しい。しかし、冠さんはシャッタースピードが遅くなっても、被写界深度を深くして撮影し、奥行きのある画面に仕上げています。そういうところは本当に上手いなと思いますね」

冠松次郎 ≪十字峡≫ 1925（大正 14）年 8 月

Q：登山を楽しむ文化が明治大正期に広まったのは、二人の功績が大きいですか？

神長「これまで何度か登山ブームがおこっています。第一次の登山ブームが、明治大正の頃、その後に、1956 年に日本隊がヒマラヤのマナスル（標高 8,163m で世界 8 位）に初登頂して第二次登山ブームがおき、その次に 20 年ほど前の中高年者の登山ブームがあって、第四次のブームが今の山ガールブームだと言われています。つまり明治大正期は、登山文化の黎明期であったわけです。この頃は、社会全体が進取の気性に富み、西洋からは困難な登山を追求するアルピニズムの洗礼を受けていた時代でした。登山ブームはそんな中でおこっていったわけですが、そのひとつの特徴は、本がたくさん出版されたことにあります。穂苅さんや冠さんなどの著した読み物や写真集などに触発されて、登山を楽しむ文化が大きく広まっていったわけです」

関次「開発が進んだ今とは全く違い、この頃の山は秘境ですからね。写真家も、秘境を探検するという気概をもって山に臨んでいました。当然、今みたいに登山道もきちんと整備されていませんし。この頃の登山家たちは、山に対して真摯に取り組んでいました」

神長「今、山ガールがブームと言われていますけど、実際には若い男性も山に入ってきていて山ボーイもたくさんいる。今の若い人たちの時代というのは、生まれた時から目の前に携帯電話もパソコンもあり、ゲームなど非現実を遊ぶ娯楽もたくさんあるけれども、それに対し、どこかで人間が本来もっているアンチテーゼのようなものが働いて、リアルなものを欲する傾向もあるのではないかと思うんですね。彼らは、中高年登山ブームにあったようなツアーで山に登ったり、登った山の数を競ったりということはなくて、もっと文化に触れようという気持ちで山に入ってきているところがある。だからこそ、もっと山を勉強してほしいと思います。その一つが、先人から学ぶということです。二人の写真からも、多くのことを学ぶことができる。彼らが当時、どういうふうに山登りをしていたのか、つまり、まだ秘境であった日本の山に臨むにあたり、どういう装備で山に入って行ったのか、どういう苦労があったのかなど、その気概や生き方をトータルに感じて、登山の歴史を知ってほしいなと思います」

冠松次郎

冠松次郎 ≪奥仙人谷の吊り橋≫ 1925（大正 14）年 8 月

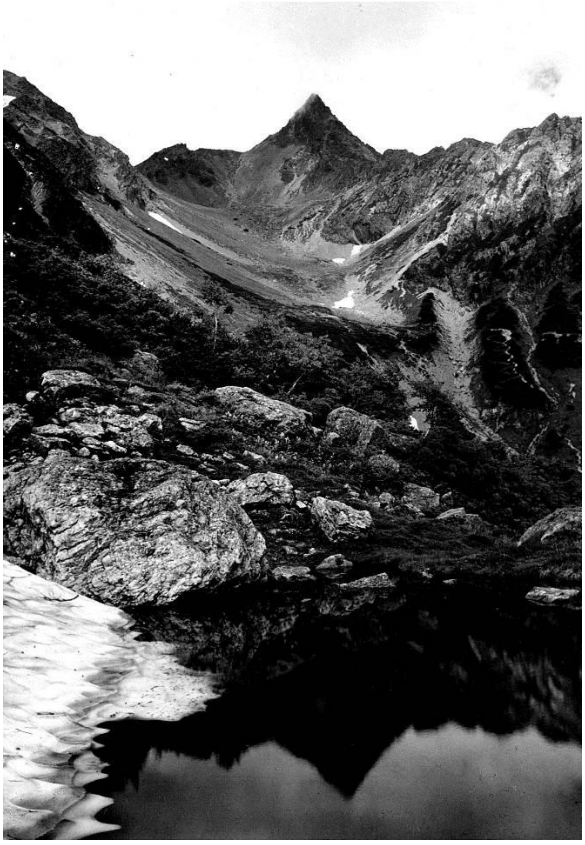
多くの岳人が高さを求めて山に登るとき、冠松次郎は「降りの楽しさ」を求めた。「なぜ谷に入るのか」という質問に対して、彼は「まず第一に降りは登りより景色が総合的に見え、立派である。次に谷は下りれば降りるほど深くなり、廊下や壁が見事だ。水について降りるとき、水流のリズムが何とも言えず快い」と答えた。

杉本誠「谷に向かう／冠松次郎」、『山の写真と写真家たち』（講談社、1985 年）より

穂苅三寿雄

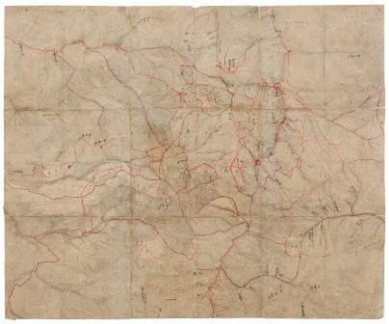
私はいつも人に言いますが山は生きていますから刻々とその光や表情は変わってゆきます。朝の清新な山、昼間の平調の山、夕方の逆光の山、雨上がりの山、雲の動きなど移りゆく美しい山の姿を撮すことは決して容易な事ではありません。（…）それ故に一週間かかった山旅に思わしい収穫がない事もあり、日帰りの登山にも優れた写真の出来ることもありますからそこにまた言いしれぬ楽しさを見ることが出来ましょう。

穂苅三寿雄『山岳写真入門』（槍ヶ岳肩の山荘、1939 年）より抜粋



穂苅三寿雄 ≪夏の槍ヶ岳と天狗池≫
1924（大正 13）年－1941（昭和 16）年

展示には愛用のカメラやピッケル、地図や自筆原稿のほか、私蔵のアルバム、写真が掲載された書籍、絵はがき、ポスター等も展示されています。



左から）穂苅三寿雄愛用のカメラ　グラフレックスシリーズ B、冠松次郎愛用のベント製ピッケル、冠松次郎が使用した 5 万分の 1 地形図「立山」（陸地測量部発行）、穂苅三寿雄の自筆原稿「槍ヶ岳開山　播隆」

関連事業

＜連続対談＞

①　「黒部を撮る・黒部に生きる」
　日時：2014 年 26 年 3 月 29 日（土）14：00～15：30
　講師：永田秀樹（『岳人』元編集長）、志水哲也（写真家）

②　「槍を撮る・槍に生きる」
　日時：2014 年 26 年 4 月 5 日（土）14：00～15：30
　講師：神長幹雄（『山と溪谷』元編集長）、穂苅康治（槍ヶ岳山荘グループ代表）

③　「山を見る・撮る・読む」
　日時：2014 年 4 月 12 日(土) 14：00～15：30
　講師：大森久雄（編集者／実業之日本社・元出版部長）、水越武（写真家）

会場：東京都写真美術館 1 階アトリエ、ただし、3 月 29 日（土）は 2 階ラウンジ
定員：各回とも 70 名
※本展覧会チケットの半券をお持ちの方は、どなたでもご参加いただけます。
※当日 10:00 より当館 1 階受付にて、整理券を配布いたします。[整理番号順入場、自由席]
※開場 13:45（予定）
※予定はやむを得ず変更となる場合がございます。ホームページ等の最新情報をご確認ください。

＜フロアレクチャー＞

毎月第 1・3 金曜日、午後 4 時より、担当学芸員による展示解説を行います。
当日有効の展覧会観覧券の半券をお持ちのうえ、展示室前にお集まりください。

開催概要

展覧会名　黒部と槍　冠松次郎と穂苅三寿雄
Valleys and Peaks；Kanmuri Matsujiro and Hokari Misuo
主　催　公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館／読売新聞社／美術館連絡協議会
後　援　公益社団法人日本山岳会／黒部市／松本市
特別協賛　大伸社
協　賛　ニコン／ニコンイメージングジャパン／ライオン／清水建設／大日本印刷／
損保ジャパン／日本テレビ放送網／東京都写真美術館支援会員
協　力　山と溪谷社
開催期間　2014 年 3 月 4 日（火）～5 月 6 日（火・休）
会　場　東京都写真美術館 2 階展示室
〒153-0062　東京都目黒区三田 1-13-3　恵比寿ガーデンプレイス内
ホームページ　www.syabi.com　　電話　03-3280-0099
開館時間　10:00～18:00（木・金は 20:00 まで）※入館は閉館の 30 分前まで
休館日　毎週月曜日　※ただし 4 月 28 日、5 月 5 日は開館
観覧料　一般 700(560)円　学生 600(480)円　中高生・65 歳以上 500(400)円
（　）は 20 名以上団体および東京都写真美術館友の会／小学生以下および障害者手帳をお持ちの方とその介護者は無料／第 3 水曜日は 65 歳以上無料

関連出版物のご案内

本展の開催に合わせて、全出品作品の図版と、関係者および当館学芸員によるテキストを掲載したカタログを発売します。　発行：東京都写真美術館　価格：2400 円（税込）

お問合せ

東京都写真美術館　事業企画課
〒153-0062　東京都目黒区三田 1-13-3　恵比寿ガーデンプレイス内　　電話 03-3280-0034
展覧会担当　関次 和子　k.sekiji@syabi.com　山峰 潤也　j.yamamine@syabi.com
伊藤 貴弘　t.ito@syabi.com
広報担当　久代 明子　a.kushiro@syabi.com　平澤 綾乃　a.hirasawa@syabi.com
前原 貴子　t.maehara@syabi.com

プレス掲載用に図版データをご用意しています。上記広報担当までお問い合わせください。

＜資料＞

冠松次郎氏におくる詩

室生犀星

劒岳、冠松、ウジ長、熊のアシアト、雪溪、前劒
粉ダイヤと星、凍つた藍の山々、冠松、ヤホー、
ヤホー、

廊下を下がる蜘蛛と人間、
冠松は廊下のヒダで自分のシワを作った。
冠松の皮膚に沁みる絶壁のシワ、
冠松の手、手は巖を引っ掻く。
冠松は考へてゐる電車の中、
黒部峡谷の廊下の壁、
廊下は冠松の耳モトで言ふのだ、

松よ　冠松よ、

冠松は行く、
黒部の上廊下、下廊下、奥廊下、
鐵でつくったカンヂキをはいて、
鐵できたへた友情をかついで、
劒岳、立山、双六谷、黒部、
あんな大きい奴を友だちにしてゐる冠松、
あんな大きい奴がよつてたかって言ふのだ、
冠松くらゐおれを知つてゐる男はないといふのだ
あんな巨大な奴の懷中で、
粉ダイヤの星の下で、
冠松は鼾をかいて野營するのだ。